

氏名	Andrea Yuri Flores Urushima <small>アンドレア ユリ フロレス ウルシマ</small>
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第398号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科共生文明学専攻
学位論文題目	Nishiyama Uzô and the Expo 70 'model core of a future city': genesis and meaning (西山卯三と1970年日本万国博覧会における未来都市のコアモデル：起源と意味)
論文調査委員	(主査) 教授 伊 從 勉 教授 広 原 盛 明 教授 西 垣 安 比 古 准教授 中 嶋 節 子

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、1970年大阪で開催された日本万国博覧会（以下「大阪万博」）会場基本計画を手がけた西山卯三（1911-1994）が提案した、会場を「未来都市のモデルコア」として提示するアイデアの起源と意味を明らかにするものである。西山は京都大学で教鞭をとった住宅計画学の実践的研究者にして都市計画家であり、定年後は町づくりの市民運動に身を投じた人物である。本論文は3部からなる。

第1部においては、大阪万博以前の欧米諸都市における歴代の博覧会会場の性格を概観する。モデル都市が建設された1904年セントルイス万博、未来都市の空間が提示された1939/40年のニューヨーク万博などが、実験的なアイデアを視覚化した先例だが、博覧会の会場整備が現実の都市計画と連動している事例は少ないことを示す。大阪万博は、東京オリンピックに続く国家的なイベントにより、大阪の郊外整備を併せて行う、通常の都市計画によらない国家事業でもあった。都市の中心部（コア）の未来像を会場計画で提示するという主張が、大阪万博特有のものであったことがこうして浮かび上がる。

第2部では、大阪万博の基本構想の成立過程を記録資料と当時の関係者へのインタビューを通して探る。会場計画に東京大学と京都大学を代表して丹下健三と西山がマスタープランナーに指名された政治的いきさつを確認した上で、決定プロセスに西山が果たした役割を追跡する。

万博会場は西山によれば未来都市のコアモデルであった。その構想は、都市の膨張やスプロール化など当時の日本の都市問題を解決する一方策として、公共交通網を備えた高密度の都市コアを提示する意図をもっていた。中心には「お祭り広場」を据え、ひとが直接交流できる場所を提供した。広場に近接して、「コア-コンビナート」と呼ばれる高速交通システムへの連結部を設け、都市ネットワークを示す。

以上の内容は、次のような過程で決定されたことを明らかにしている。基本計画作成に先立つ1965年末の基本調査から66年5月の第二次草案に至るまで、作業は京都大学チームによって行われ、上記の構想が盛り込まれた複数の敷地区分の案が検討されて、第二次草案に絞り込まれた。ところが第三次草案の検討が丹下チームに移され、入場口が増設され平面計画の経済効率化が図られたのは、日本万国博協会と建設省の意図によるものと申請者は判断している。第四次草案では敷地がさらに整理され、お祭り広場に巨大な屋根が載るが、基本計画の方針は最後まで維持され、丹下も基本計画の変更を意図していなかった。すなわち、西山チームが初期の2段階で敷地構想の大枠を決定していたことが確かめられる。

1966年末以降は、具体的な建築計画過程に入った。そして丹下が建築プロデューサーとなり、東西のメンバーがひとつの設計チームに再編された。西山がそのチームからは外れたため、この建築チームが万博の建築設計チームと世界的にも認知されることとなった事情が判明する。

第3部では、「未来都市のモデルコア」の構想が、西山が1960年代に展開した都市将来構想の諸提案のなかで発展した経過を明らかにし、万博会場計画にどのように反映されたかを分析する。

1960年開催の東京世界デザイン会議において、西山はふたつのアイデアを発表した。都市の将来像を議論するために具体的なイメージをたたき台に合意形成を進める「構想計画」のアイデアと、都市域のスプロールを防ぐため高層高密度の中心地区を形成する「イエポリス」構想である。それらが、60年代を通して西山が京都や奈良について提案する、広場を中心に据えた帯状コアをもつコンパクトシティのモデルの源泉であると申請者は認めている。万博会場計画はそれを現実に実験的に示すものであったことを、浮かび上がらせる。

西山の上記都市構想には、次のような計画思想が影響を与えていることを申請者は確認する。20世紀初頭の田園都市運動にみられる中心地区の考えや、中心大都市と田園都市群とを公共交通手段によって都市ネットワークを形成する理念、そしてソビエト連邦で構想された線状都市計画、さらには戦時下の都市分散原理に発展させた石川栄耀などの都市圏の理論である。英国において、西山と似た立場をとって、自然発生的な施設や伝統的な都市コアを近代化に応用しつつ都市ネットワークを追及したトマス・シャープの理論なども、西山の発想に含まれていたことを申請者は指摘する。

最後に、60年代の「構想計画」が万博基本計画に果たした役割を考察する。構想計画とは、厳密に定められ固定した未来像ではなく、理想と現実を調整する描画的な道具であり、場合によっては、将来生起する矛盾や危険など負の面（地獄絵）も描き出す。都市計画や地域計画に市民意見を取り入れる方法が制度化されていなかった当時、計画過程の民主化の道具と西山は考えていたと申請者は捉える。万博計画に市民意見の聴取はなかったが、西山の基本計画は主体を代えて丹下チームに引き継がれるだけの柔軟性があったことを示すのである。

以上のように、西山による1960年代の未来都市コアモデル計画の変遷のなかに万博会場計画を置き、その時代的意義を検討した。今日、当時より多種混成的となった都市計画思想と技術の変化により、計画過程に市民が参画し、専門家と意見の調整をする構想策定が急務となった。万博会場計画はその具体例を60年代に西山が示そうとしたものと結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、1970年大阪開催の日本万国博覧会（以下「大阪万博」）会場計画を、60年代の日本の都市計画とその思想を象徴する主題として取り上げているところに特徴がある。

従来の大阪万博研究では、東京オリンピックに続く国家イベントとして、あるいは大阪万博以降始まる一連の博覧会事業の初発として、または近畿圏整備の切り札として、博覧会関連の都市事業に注目するものがある。国家イベントと都市計画の関係は、近年ようやく都市計画研究の課題として取り上げられるようになった。しかし、一時的な博覧会会場の計画自体をひとつの夢とみる以外に、都市計画的に意義のあるものとして注目する研究は従来少なかった。また、会場基本計画の発案者である西山卯三については、都市計画家であり市民運動の組織者として著名な人物でありながら、研究の対象となることがなく、西山が残した膨大な資料が整理された昨今、ようやく国内で研究論文が出始めている。申請者の研究とはほぼ同時期に、西山の万博計画を扱った論考が複数出たが、万博会場計画を単独で扱うのみである。西山における都市思想の展開のなかで検討している点で、申請者の論考は先駆的である。

従来、会場基本計画の発案者である西山の存在は、万博会場の建築設計統合プロデューサーであった丹下健三の影に隠れ、基本計画に込められた「未来都市のコアモデル」という西山の意図は、公式記録に記録され西山自身も発言しているものの、広く認知されることがなかった。

西山は、戦前の住宅営団勤務時から住宅計画の専門家として出発し、戦後京都大学に奉職後、万博会場基本計画以前に、京都と奈良についての都市構想の提言を公表している。市民の立場に同情的で国家の住宅政策への批判者として著名であった西山が国家プロジェクトに関係する意外な出来事は話題となった。しかし、万博会場計画の起源は広く知られることもなく、西山が発想した「お祭り広場」も丹下が設計した大屋根構造により、構想も丹下のものと誤認されている。申請者は、第2部において、万博基本計画の推移を記録資料により入念に辿り、西山が率いた京都大学チームが基本計画の骨格を決定した蓋然性が高いことを確認している。その上で、それにもかかわらず、以上のような認識が世に流布した記録に残らない理由を、当時の西山の協力者へインタビューを行うことにより明らかにした。これらの成果は、申請者の在学中に国際学会で公表され、海外の研究者に特に強い印象を与えている。

本論文の最大の功績は第3部にある。万博会場基本計画を西山の都市構想の推移のなかに位置づけると、イベント会場計

画でありながら、万博会場計画が西山の都市構想が実現した唯一の事例になるからである。

西山が1960年に唱えた「構想計画」は、今日の都市計画用語でいえば、市民議論に供される都市計画決定以前のマスタープラン草案である。西山は万博会場計画に先立つ京都計画や奈良計画で、具体的な都市の構想を描いた。申請者は、根幹の都市モデルが西欧都市のコアモデル起源である点を確認した上で、日本の都市条件に合わせて調整された当時の時代的制約を帯びた近代化モデルと評価した。日本には存在しなかった市民広場を備えた文化社会施設を都市中心部に集積し、住宅も高層化を容認する。そのコアを帯状に延ばし、それに沿って、公共交通網を連結させ、自動車交通を制限し、都市の郊外へのスプロールを抑制する、今日いうところのコンパクト・シティの提案とみている。

60年代以前に知られていた西欧の都市改造のイメージに大きく影響されていることは確かである。しかし、市民広場を必ず置き、万博計画では「お祭り広場」と名付け、都市コアの中心に位置させたのは、構想計画が前提にしている、市民が議論を通じて構想計画を変えることができる民主的な計画決定過程の実現を期待してのことであった。この点において、申請者の分析は時代の制約をよく捉えている。あえて意見を付記すれば、それが住民のいない博覧会場の計画案であった点に、歴史の皮肉がある。

万博の後、日本政府の公募に応じた『21世紀の設計』提案において、制度上行政が決定する「都市計画区域」の用語に代えて「自治区域」という用語を西山が造語している点について、西山の構想計画が前提とする市民の計画決定への参画を表示する構想計画の発展形態と申請者は読み取っている。妥当な解釈といえよう。

以上のように、1974年の退官を境に、都市計画案の提案者からまちづくり市民運動の擁護者に転身した分りにくい西山卯三という都市計画家の退官前の主要な仕事に対し、万博会場設計という象徴的出来事を他の都市構想の提案と結びつけ論ずる一貫した視点を提示したことにおいて、戦後都市計画理論研究と大阪万博研究および西山卯三研究のいずれにおいても、新しいパースペクティブを開いたものとして高く評価できる。

本論文は、文化・地域環境の構築・保全を総合的に考察する共生文明学専攻文化・地域環境論講座にふさわしい内容を備えたものといえる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。